



# シモマツチの 校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男 盛岡中央高校附属中学校副校長

## 第28回

# 自由の翼

### □「アート」による対話の場をつくる

岩手県立花巻北高校の校長時代、「自由の翼展」というイベントを実施したことがあります。それは、学校という境界を超えて様々なジャンルの方とつながり、アートという共通言語による対話の場をつくりたいという思いから企画したものでした。そのコンセプトは次のようなものです。

私たちは何らかの集団に属しています。もしかしたら、人はそういった集団や組織によって「守られている」存在なのかもしれません。しかし、集団の属性という関係性の中で生きることが必ずしも安全で正しいことではありません。もしかしたら、守ってくれていたはずの集団や組織や肩書が、自分を卑下したり、人を見下したりという負の局面を生み出す原因になるかもしれません。人は肩書や役割という、社会がこしらえた境界に囲まれて生きていくかのように見えます。でも、そん

な境界をとつばらったとき、はじめて見えてくるものがあります。それは、人はみな同等に価値があること。そして、互いを認め、リスベクトしあう関係です。私はそこに、進歩や変革を生み出すエネルギーが潜んでいると思うのです。  
(自由の翼展パンフより)

話は変わりますが、花巻市には「るんびにい美術館」という知的障がい者の作品を展示する美術館があります。そのホームページにはこんなことが書かれています。  
「私たちの心は、沢山のものを区別します。障害者と健常者。おとなと子ども。男性と女性。国、人種、人や動物や植物……。この世界は、無数のボーダーでできています。もしも、すべてのボーダーを心から消し去って、それらをただ一つのものとして見ることができたなら。もしそんなことができたなら、世界はどんなふうに見えるのでしょうか。もしかしたら、そこにはただ命の輝きだけがあるのかもしれない。  
(中略) ボーダレスはなぜだか魅力的です。

それは、きつと愛とよく似ているのです」

私はこの文を目にしたとき、「自由の翼展」とつながるポリシーを感じました。そして、矢も楯もたまらず、美術館に出かけたのでした。

美術館に足を運んだ時、最初に気づいたのは、館内にカメラの絵が描かれた注意書きのシールがたくさん貼られていることです。「撮影禁止なんだな」と私は思いました。ところが、よく見るとそうではなく、真逆でした。写真は自由に撮ってよいことや、SNSで発信して構わないということが書かれていたのです。私は、応対してくださったアートディレクターのIさんに、アトリエで活動する作家さんの顔写真を撮ってもよいかがいました。すると、もちろんどんどん撮って構わないとのことでした。Iさんいわく、写真撮影を許可したり、SNSでの発信を促すのは、彼らの素晴らしさを広く社会に示したいからとのことでした。そして、発信によって活動が認知される中で、作者である彼らに、自信と誇りが芽生えてくるのだと話されました。

彼の話を聞いて、るんびにい美術館は、偏見や差別を乗り越えるための社会的活動を行う場にとどまらず、彼らに創作という力強い歩みを与え、それを社会に発信し、「生きる力」を培っていく場でもあるのだなあと深い共感を待たのでした。

### □「不自由」から起こる教員不祥事

私はこの訪問を通して、もう一つ別の気づきを得ていました。それは教員の不祥事問題との関連です。

教員の不祥事が起こるたびに、教育委員会から通知があり、コンプライアンスのさらなる徹底が求められます。不祥事を「撲滅」するには、「ひたすら管理職が職員に言い聞かせよ」と言われます。結果、職員朝会や職員会議での訓示や宣言、コンプライアンス講話やスピーチ、啓発パンフの配布などが繰り返されます。でも私は、少し別の見方で職員の不祥事問題の解決について考えていました。そして、るんびにい美術館への訪問によってこのことを改めて整理してみようと思ったのです。

それは、学校という教育現場の内向き性からの脱却という視点です。教育公務員としての自覚を促すことは、法律の条文やコンプライアンスマニュアルの熟読を愚直に繰り返すことで達成されるのでしょうか。まるでそれは、「できない生徒は、100回ノートに書き写せ」的な旧来のパッシブな学びの手法のようにも思えます。

私は「自覚を促す」ためには、彼らを広く社会に発信し、認知させていく外向きの取り組みが必要ではないかと思うのです。

学校の持つ貴重なリソースは「誇り高いプロフェッショナルの教師集団」であり、学校は、彼らと、彼らが有するコンテンツを世界に向けて発信する使命を持っていると私は思います。教師の実績を正當に評価し、発信することで、彼らは社会からリスパクトされる存在となり、その結果、誇りと自信が培われていくのではないかと。教師の不祥事問題をなくすには、頭ごなしに禁止や義務や制限を強いるだけではなく、教師が外に羽ばたくための「自由の翼」を持つことに私は意味を感じるのです。